
ぬらりひよんの孫～百鬼夜行対魔人～

紡ぎ人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぬらりひよんの孫〜百鬼夜行対魔人〜

【Nコード】

N24710

【作者名】

紡ぎ人

【あらすじ】

その昔、名前だけで妖怪を怯えさせた人間がいた。

妖怪によって一族を滅ぼされ、すべての妖怪を殺すことを誓い、魔道に堕ちた『魔人』。

現代に転生した彼の者は再び妖怪斬りを始める。

それと並行して日本各地に封印された『魔神』達の眠りが醒めようとしていた。

京での戦いを終え、普段通りの日常を謳歌していたリクオに再び危機が。

妖怪と魔人の戦い、日本を舞台に、幕開けでございます。

魔人伝説その壱

その伝説の始まりは、今を昔1400年前の紀伊国。

その国の山の中に、大陸の戦闘民族の血を引く刀鍛冶の一族がおったそう。

大陸の戦闘民族ちゅうのは漂泊の民でもありまして、国や氏に属さず、山の中に公界を作り上げて生きていたそう。

その一族は、山の中でひたすらに刀を打ち、自分達の『業』と『技』と『術』を高めていたんだとか。

彼らがいた山は、今や霊山と名高い『高野山』だったという。

しかし彼らも常に平穩無事に時を過ごしていた訳ではないらしく、時の王朝や周囲の豪族に目を付けられ、侵略を受けることも多々あった。

しかし、彼の一族はその度にそれを退け自分達の村を守り続けてきた。

一族にとっては自分達の極めているものを『人』で試す機会が定期的に巡ってくるのだから、むしろ嬉しかった。

でも彼らの歴史に終わりは唐突にやってきました。

ある豪族との合戦を終えた夜、一族の村は妖怪に襲われました。その妖怪は、これまで戦ったどんな妖怪よりも強かった。

後々、災厄にまで例えられるまでに畏れられる妖怪であった。

妖怪は合戦の疲れに浸たっていた一族の村を襲い、そのすべてを破壊し、喰らった。

一族の人間達は妖怪の桁外れの力の前に成す術無く喰われていった。

だが話はそこで終わらない、いや終われない。

ここで終わってしまえば、それは伝説ではなくただの悲劇。

妖怪の過去の虐殺の一例に成り下がってしまう。

妖怪が破壊し、殺し、喰らった村の瓦礫の山の下の人の死骸の中に
1人の童がいたのだ。

小さな刀を両手に握り締め、家族の骸に埋もれて、震えていた少年
が。

妖怪が過ぎ去った後、少年はゆっくりと骸の山から這い出て、辺り
を見渡し…その惨状を思い知った。

誰もいない、何も無い、何も来ない、何も現れない、何も起きない、
何も聞こえない

まるで死んでいるように思える、見慣れた風景

その場所にあつた昨日までの日常はたった一晚で、たった一匹の妖怪によつて奪われた。

なぜ？

自分達は何も悪いことなどしていないのに
山の中で、ただ極めることしかしていなかったのに
無意味な殺生などやらなかったのに
生きるため、村を守るための殺生はした
でもその殺生を楽しんだことなどなかったのに

『…どつして…こんなめに…』

少年は泣いた

七日月七晩、一度も途切れることなく泣いた

骸の山の上で、ただただ泣いた

まるで、自分の中から何かを吐き出すように

泣き終わったら、今度は叫んだ

山中にこだます程に大きく、

木々が同情しざわめいて嘆く程に悲しく、

畜生が怯え叫ぶ間はけつして巢穴からは出ようとはしなかった程におぞましい叫びを。

叫び終えた少年は、一族の骸を村ごと焼いた。

焼け残った骨を集め、砕いて鉄に混ぜて、産まれて初めて造った自分の『刀』の材料にした。

少年は刀に思い込めた。

仇を討つ、妖怪を殺す、こんな仕打ちを与えた天を憎む、無力な人間の己を怨む…

そう思いつつ、鉄を打つこと千

少年が初めて造った刀は『妖刀』になった。

それから少年は山奥に封印してあった禁術を解いた。

自分を人で無くすために、力を得るために、刀に込めた思いを遂げるために。

そうして気づいた時には、魂は「真つ黒」だった。

力を手にいれた、何度も蘇る術を身につけた、思いを込める刀を造る業も知った

だから魂は真つ黒だった。

でも少年は驚かなかった、いや驚く気がなかった。

何故なら、そんなことはわかっていたから
村を焼いた時に、自分の情も焼いたから。

いや、自分の「人間」という部分は一族と一緒に妖怪に殺されたんだ。

それらをやり遂げた少年は、山を下りた。
惨劇の夜から10年も経っていた。

妖怪の行った先なんてわからない
なら日本のすべてを回ろう
どんな妖怪だったかなんて覚えていない
ならすべての妖怪を斬ろう

そうして少年は、日本中を巡って目についた妖怪を片っ端から斬っていった。

寿命が来て死んでも、少年は禁術で生まれ変わって、また妖怪を斬った。

いつしか日本中の妖怪が恐れるようになり、妖怪達からは

『魔人』

と呼ばれ始めた。

これが、りよほう呂封 やすつな安綱という魔人が生まれて間もなかった頃のお話。

第一幕 リクオの悪夢（前書き）

とにかくどんどん死にます

第一幕 リクオの悪夢

「……なんだよ、これ」

いつも見慣れたはずの風景。

…のはずなのに、変わっている。

いつも見慣れている浮世絵町が…焼けている。

家が、道が、店が、ビルが…燃えている。

「た…大変だ…！」

消化することなんてできないけど、ともかく走って丘を下りた。

…そういえば、なんで僕は丘の上にいるんだろ？

「はあ…はあ…はあ…」

町に来て1つ分かったことがある。

それは人が一切死んでいないのに、妖怪の死体が道を埋め尽くしていること。

人の死体がないどころか、姿さえ見当たらない。

あるのは妖怪の死体ばかり…。

見慣れた化け猫組の化け猫達やいつぞやの妖怪騒動の時に付いてき

た名も知れぬ小さな妖怪、果ては三羽鳥の配下たる浮世絵町の烏達までもが首を殺がれて道に落ちている。

「な…なんで…こんなことに…そうだ、屋敷は…！」

不意に頭に自分の家のことが浮かび上がり、リクオは奴良屋敷に向けて駆けた。

奴良組の宗家である屋敷ならば、あそこにいる妖怪達ならばまだ持ちこたえているかもしれない…！

そんな希望に駆られていた。

「…嘘だ…そんな…」

屋敷が…燃えている。

全部が燃えているわけじゃない…でも燃えている。

壊れた塀や、庭の松の木とかが燃えている。

僕の正面には、毎日出入りに使っている屋敷の門がある。

でもいつも見てるしっかりした形じゃなくて、壊れて真っ二つになっ
ってひしゃげてる。

「……………」

啞然としていた矢先、何かの拍子に門の一角が崩れた。

崩れて現れた場所には、血溜まりとその血に浸された鉄紺色の衣が

見え

「…っ！青田坊！！」

瓦礫の下敷きになっている青田坊がいた。
瓦礫に埋まっているのか、右手と右袖の布しか見えていない。

「……そ、そんな……」

青田坊が殺られるなんて…。

奴良組で一、二を争う剛力の青田坊が…。

「ギヤアアアー！」

屋敷の中から叫び声が聞こえた。

まだ生きてる者がいるらしい。

「…っ、青田坊…ごめん！」

あの叫び声の主を救うには、青田坊を救うのを断念しなきゃなら
ない。

もう息もしていない青田坊の上にかかっている瓦礫を踏み越え
て、僕は屋敷の中に入った。

袵々切丸を持って。

屋敷の中は悲惨だった。

言葉にするのが嫌になるくらい酷かった。

門を越えて、右を向けば扉に自分の武器で串刺しにされた黒田坊が
いて。

玄関には、くり貫かれた目玉の代わりに刀を刺された一つ目と、魚みたくに頭を三枚に下ろされた算盤坊と、顔中に槍を刺された大ムカデと、その大ムカデの身体に釘代わりに刀で杭をされた鬼女もつたいないお化けと木魚達磨が横たわっていて。左の、庭に抜ける道の塀には羽根に刀を刺されて磔にされた三羽鳥と烏天狗が並んでいて。庭の池は血に染まっていて…中には皿の取れた河童と、雨造が浮いていた。

「うっ………！」
死臭と、焼けた肉の臭いが鼻を包んで刺してくる。
もう言葉も出てこない…。

「うっ………ん？」
ふと、足に何か当たったような感触がした。
それで下を向いてみたら　　納豆小僧の首があった。

「……！」
一々驚いてなんてもういられない。
いられないけど…それでも、いつも顔を合わせる奴が首だけつてのは…おかしいよ。

ふらふらと歩いて、やっといつもの庭に来れた。
みんなの死体を見てたら、やっぱり足取りが遅くなるみたいだ。

『ぴちゃ……ぴちゃ……』

水が滴るような音がする…。

しかも、右と左の両方から。

「……………」

どっちに向いても、あるものは変わらない。

でもとりあえず右を向くことにした、横断歩道を渡るときは右からだしね。

「……………牛鬼も…鳩くんまで……………」

幹部の話し合いに使われる部屋の中には、四肢切断された牛鬼と、爪をばらされた牛頭丸と、牛鬼の死骸に埋もれるようにしてくたばってる馬頭丸と、綺麗な毒羽を筆られた鳩くんがいた。四人の血が滴る音が、さっきの音の正体だったらしい。

続いて左の　　しだれ桜を向く。

「お…おじいちゃん…も……………」

この展開ばかりは予想出来なかった。

しだれ桜の右の枝に淡島が、左の枝には自分の髪の毛で吊り下げられた毛倡妓が、そして幹には心臓に自分の刀を刺されて留められているおじいちゃんが。

「…ふふっ…ふふふ、ははは……………」

全然面白くないのに、笑ってしまう。

頭では分かっているのに、笑みがこぼれてくる。

ああ…あんまりみんなの死体を見すぎたから…おかしくなったのかもしれない。

おかしいと可笑しい……………。

似ているから笑っちゃうんだよ、きつと。

「……………ま…リクオ…リクオ様！」

「はは…っ！」

呼ばれるのと一緒に頭をおもいつきり殴られた。
思わず身構えて、後ろを振り向くと

「なに笑ってるんですか！！無事なら早く逃げてください！！」

息も切れ切れに叫ぶようにそう言った氷麗がいた。
ああ、頭を殴ったのはその氷か。

「氷麗…無事だったんだね」

「そんなこと言ってる暇はありません！今首無と鎌鼬と猩影くんが
時間を稼いでます、早く逃げてください！！」

氷麗は僕の話の聞こうとしない。
それだけ切羽詰まっているんだろう。

「待つてよ、氷麗！一体何が起きてるんの！？誰がこんなことを」

「説明は後です！ともかく早く逃げませんと！」

僕の問い掛けに答えようとせず、氷麗は僕の服の袖を掴んで引っ
張る。

「誰を逃がすって…？」

後ろから声を掛けられた。
聞いたことのない、若いアルトの、それでいて底冷えがするような声だ。

「!！」

「くっ…！」

氷麗と同時に振り向くと、目の前にポトポトと三つの何かが降ってくる。

…よくみればそれは、自分の縄で頭を切られて身体に縛られている首無と、自らの鎌を首に突き立てられたイタクと、毛皮を剥がれた拳げ句額に刀を突き刺された猩影くんだった。

「残りは雪女だけかと思ってたが…なんだ、まだいたんじゃねえか」

そこに誰かが歩いてくる。

屋敷を焼く炎が後光となっているから、男か女か把握できない…でも手に刀を持っていることはわかった。

「っ…リクオ様には指一本触れさせません!!」

氷麗が、冷気を集めて作った氷の薙刀を手にしてそいつの前に立ちふさがる。

「威勢はいいな…だがそんななりで止められんのかよ？」

「妖怪を…甘く見ないで!!」

氷麗はそいつに向かって掛けると同時に、僕の背中を押しした。氷麗としては、僕を逃がす腹積もりだったんだろうけど…生憎それには応じれない。

ここまで組の仲間を殺されて
自分だけ逃げるわけにはい
かない。

「氷麗、僕もたたか」

押された勢いで少し進んでしまった体を持ち直し、身をひるがえして氷麗のもとに戻るうとした。
…けどもう遅かった。

振り向いて見たのは、体を左斜め上から切られて血を噴き上げて崩れる氷麗の姿だった。

「あ…あ…ああ…！」

さっきまで。

たった。

たったさっきまでそばにいた最後の仲間が…目の前で死んだ。

「わ…か…に…げ…て…」

それが氷麗の最期の言葉だった。

「っ…！」

何かが、頭の中で弾けるのを感じた。

それは同時に、僕の悲しみを怒りに変えた。

ふつつつと煮えたぎったような、こんこんと沸き上がるような怒りが頭を、理性を染めた。

「うわああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

袂々切丸を抜き放ち、両手で構えて、そいつに向けて突き立てようと伸ばす。

構えなど、狙いなど、速度など、関係ない。

自分が変化出来ていないなど気にしてられるか ！！

「勝てねーよ、混ざりモン」

さも当然というように吐き捨てたそいつは、袂々切丸ごと僕は斜めに切り裂いた、いや両断した。

僕の身体は、上半身は、割れた袂々切丸を握ったまま宙を舞った。

こと切れる前にわかったのは

そいつは僕と同じ人間だということだ。

第一幕 リクオの悪夢（後書き）

ちなみに時間帯としては昼です

第二幕 曇りだす日常（前書き）

お久しぶりです。

復帰一回目の投稿です

第二幕 曇りだす日常

「うわあああああああ！！」

今朝の奴良 リクオの目覚めは悪かった。

最悪、正にそのひとことに尽きる目覚めだった。

「はあ……………はあ……………はあ……………」

動悸のように心臓は荒く脈打ち、喉がつかえる感覚がして息もしづらい。

季節は秋の中頃、ようやく涼しさを感じ始めたというのに、リクオの身体は汗で濡れていた。

額は勿論、髪や寝間着が汗で湿るほど汗をかいていた。

「……………繋がってる」

寝間着を捲って、右腰から胸、更に背中も手でペタペタと触っている。

夢で斬られたところを「夢だった」と自分に教えるように、確かめるように。

それに安堵して溜め息を漏らす。

その時自分の部屋に誰かが急いで近づいてきている、物凄い足音が聞こえた。

そしてそれが遠くから聞こえているかと思えば

「いつ如何なさいましたリクオ様！？」

大声と共に部屋の引き戸を開けて目の前にいる。

そんな感じでリクオの前に現れた着物姿の少女。
名は雪女、れっきとした妖怪である。

空色の長く艶やかな髪、渦巻き状の目、着物の色に負けず劣らずの白い肌の、パツと見はそうそうお目にかかることができない美少女である。

ただし妖怪である。

「朝から大声を出された……どう、されたんですか？」

リクオに対して奴良組一忠誠心が高い雪女は、朝っぱらから叫び声をあげたリクオのもとにいち早く駆け付けたのである。

未だ布団に下半身を入れたままのリクオのもとに歩みより、膝から座った。

そこまではよかったが、斬られていないか確かめるために上半身だけ服を脱いでいる（つまりは半裸）リクオを見て、不覚にも顔が赤くなってしまったのだ。

変化したリクオの半裸なら見慣れているのだが、人の姿のリクオの半裸は滅多に見かけないのだ。

しかもうなされていたリクオの身体は汗で濡れていて、息も荒いのも相まって余計に雪女の心を揺さぶったのだ。

「…つ、氷麗？氷麗だよね…？」

そんな自分とは裏腹のリクオ。

氷麗という人としての名前を呟きながら、自らの方に身を乗り出して顔を覗き込んできた。

「ど、どうしましたリクオ様？私の顔に、何かついてます？」

訝しげに目を見張って自分の顔を観察してくるリクオに、氷麗は困惑しその心中は穏やかではなかった。

もつともその理由は、身を乗り出してきているために間近でリクオの身体を見ているからだ。

夜のリクオの半裸は見慣れているが、人としてのリクオの半裸はリクオの幼少期以来目にするのが減っていたため、人間として成長しているリクオの肉体に、氷麗が刺激されて勝手にドキドキしているだけである…。

「……よ、よかったああああ!!」

急に目を潤ませたかと思つた次の瞬間には、リクオは氷麗に抱きついていた。

「ひゃああああ!!」

リクオからの熱烈なハグに、氷麗の興奮のゲージは一気に臨界点に達した。

想いを寄せる相手から抱きつかれている、それだけでも一般子女は興奮するが、そういうことには氷麗は二割増しの反応を起こす。

シチュエーションも起因している。

朝、まだ自分以外の誰もこの場には来ていない。

しかも相手は半分裸。

男だろうが、女だろうが、妖怪だろうが、「恋」しているなら興奮して当然だ。

「……ひくっ……よかった……ほんとに……よかった……」
生きていてくれたことに対して喜んでいるリクオ。

「ほ、ほほほほんとに、ど、どうどうどうしたんです、わ、若……」(ついに、若は私のことを……)

なんてピンクな妄想に浸っている氷麗。

おもいつきり誤解している。

とはいえ、リクオも誤解である。

というか事実無根。
なので……

「そうだ、首無は？青田坊は？烏天狗は！？」
他の面々の無事を確かめに走り去ってしまった。

……雪女を放り捨てて。

「……うう……リクオ様……あんまりですう……」
その後、リクオの部屋にはぶつぶつと何かを呟きながらリクオの布団に突っ伏してる雪女を見掛けたと、屋敷中の妖怪が見たいう。

数十分後

「まったく、朝っぱらから騒がすんじゃないわい」

ようやく落ち着いていたリクオが、縁側で祖父、ぬらりひょんに叱られていた。

「ご、ごめん。妙にリアルな夢だったから……真に受けちゃって……」
苦笑いしつつもリクオはまだ心中が穏やかではなかった。

夢で切られた場所が、また開くのでは、まだ切られたままなのは、と不安だった。

「そう何度も撫でて確かめんでも、お前の腹から胸は切れちゃおらん」

「うん……わかつてはいるんだけど……」
自分でもわかつてはいるがそれでも気にせずにはいらなかった。
本当に切られたように、あの夢は生々しかったのだから。

「はあ。いつまで半裸であるつもりじゃ、早よう着替えんと学校に遅れるぞ?」

「え?……しまった!今日日直だったんだ!??」

言うやいなや、駆け足で自室に戻り着替えを済まして家を出ていったリクオ。

その後、人の姿をした雪女と青田坊も付いて行った。

「やれやれ、今朝は一段と騒がしいわい」

「三代目を襲名して多少落ち着かれたかと思っていきましたが、まだまだようですな」

朝のドタバタの元凶(リクオ達)を見送って、茶を啜ったぬらりひよんの隣に片目を黒髪で隠した長身の男が座る。

「前に比べればマシにはなったがの、牛鬼よ」
そう言つて隣に座つた男を見やるぬらりひよん。

男の名は牛鬼、人の姿はしているがれつきとした妖怪で、奴良組の貸元頭である。

「はつ。……それよりもリクオ様の夢のことですが」

「ふん、大方三代目を継いだばかりの不安で怖い夢でも見たんじゃろうな。……と流したいところじゃが」

「奴良組を襲つて我々を殺したものが、妖怪や陰陽師ではなく」
「ただの人間の姿をしていた……と言つておつたの」

夢の中とはいえ、奴良組が壊滅させられ、自分たちも殺されているのだからいい気がしないのはわかるが、二人が気にしたのは奴良組を襲つたものだった。

「ただの人間」

、果たしてどこが気になるのだろうか?

縁側の二人の表情は険しかった。

その日の放課後。

清継に呼び出されたリクオは氷麗とともに清十字団に出席していた。

「で、清継くん。特ダネを仕入れたって一体どんな話なのよ」

中学生には不相応な金髪を指で弄びながら巻 紗織はつまらなさそうに呟く。

「最近都市伝説ばかり調べてたけど、今回も都市伝説絡み？」

その隣の鳥居 夏実もまた同調して声を出す。

巻ほどではないが彼女も乗り気では無さそうだ。

そう女子二人に言われた清継は、あくまで落ち着いていた。

額に人差し指と中指を当てて足を組んで椅子に座っている、その様はまるで古〇〇三郎だ。

「…ふっふっふ、鳥居くんの言うとおり確かに最近では都市伝説にかまけていたのは認める。がしかし！僕達の目的はあくまでも妖怪情報！その妖怪に纏わる耳寄りかつ聞き逃せない情報を手に入れたのさー！」

徐々に声量を上げ、両手をさもバンザイするように広げて上げる。どこかの演劇団でも通用しそうな動作だ。

「それで清継くん、その情報ってのはどんな話なの？」

埒が明かないと思ったのか、リクオが改めて清継に聞いた。

「うむ、では話そう。まずは諸君、妖怪を退治するのは陰陽師だけではないということを知っているかい？」

「陰陽師以外にも妖怪退治する人っていたんツスか、清継さん」

リクオに続いて鳥 二郎が話の間を持つ。

「そう。歌舞伎や能、武將の武勇伝の中に語られている妖怪退治の

ようなものを生業とした人たちも昔はいたそうだ」

「武闘派陰陽師とも混同されたそうだが特殊な術や式神を使わず、あくまで刀や格闘技を使う彼等を妖怪と闘うもの、という意味で妖闘師と呼んでいたそうだ」

そう言うのと清継はパソコンを取り出し、妖闘士に関するHPを開きその画面を全員に見せる。

画面には刀を持った鬼と戦う侍や、巨大な百足に弓矢を放つ大男や、槍で蜘蛛を串刺しにする僧兵たちが描かれた絵が表示されていた。

「すごい…。前に見た、ゆらちゃんが式神で戦ってるのも凄かったけどこれに描かれてる人たちは、なんかもつと必死みたいな感じがする…」

いずれも巨大な妖怪と戦う彼等は自らも傷ついているが、それでも妖怪に刃を突き立てている。

昔の絵ではあるがその表情には鬼気迫るものがあり、それが家長カナにそう言わせていた。

「その妖闘士の中でも一際異彩を放った存在が…」

キーボードとマウスを操作し、清継はまた別のHPを開く。

「『魔人』と呼ばれたこの絵の人物だ」

出された画像にはボロボロの着流しを纏い、異様に反り返った刀を逆手に持って、片手に妖怪の首を数個掴んで、虚ろな眼差しで微笑みを浮かべた、まるで幽鬼のような男が描かれた絵が出されていた。血濡れた刀と血が滴る妖怪の首以上に、清継が魔人と呼んだ絵の男の表情が余計に不気味だった。

「な、なにこの絵…」

「気味悪い…」

巻と鳥居がそう言うのも無理はない。

前述した男だけでも気味悪いが、それに匹敵する恐ろしさを醸し出

しているのは男の周りを取り囲む、いや正確には「取り囲んでいた」であろう妖怪の、屍だった。それを確認したとき

「!!!!!!」

リクオは戦慄した。

屍となった妖怪の殺され方が、昨日自分が夢見た光景に似ていたのだ。

蛇の妖怪の身体に並んで刀を突き立てられ死んでいる妖怪や、壁や矢倉に吊り下げられたように死んでいる妖怪など、多少の差異はあるがあの夢での殺し方に似ていた。

しかし、そのリクオ以上に戦慄していたのが氷麗だった。

「お、及川さん？」

心配して声をかけた島。だがその声に反応できないほどに当の氷麗は怯えていた。

正面からでなくとも絵に向き合えていない。

絵を見ることさえ出来ていない。

俯き、膝に手を付いてただ震えていた。

藍色の髪も、年中身に付けているマフラーも揺れる程に震えていた。

「ごめん清継くん。僕及川さんを保健室に連れていってくるよ……」

「あ、僕も一緒に……」

氷麗の様子からだ事ではないと判断したリクオは、そう言って部屋から氷麗を連れ出した。

…島の声には一切反応せずに。

「…すみませんリクオ様ご迷惑をお掛けして」
ひとまず屋上に氷麗を運んだリクオ。

人がまざらないここならば、自分たちが妖怪であることを耳にする

ものもおらず、妖怪としての話し合いができるベストポイントなのである。

「いいよ、それよりどうしたんだ氷麗？あの、『魔人』の「それ以上言わないでください！！」」

氷麗の叫びがリクオの声を遮る。

見れば両手を組んで肩を掴んで震えていた。

先程より状態が悪化していた。

「お、お願いしますから…もう『魔人』という言葉は口にしないでください…リクオ様には効きませんが、あれは、妖怪には通り名すら憚れるものなんです…」

「う、うん…わかった」

それ以上、リクオは何も言わずただ氷麗の傍に座っていた。

その頃の清十字団部室

「…ふむ、奴良くと及川さんには悪いが、話を続けよう。この魔人と呼ばれる男は、1400年程前に初めて存在が確認されたと言われているそうだ」

「1400年前って言う…聖徳太子が十七条の憲法とか冠位十二階を決めた頃だよな？」

「でもそんなの、ただの伝説なんですよ？」

「そう、確かに最近まではただの伝説とされていたさ。この絵だけじゃ魔人の存在を確定する証拠にはならないからね…しかし」

清継は再びパソコンを操作して、また新しいHPを開く。

「10年前に和歌山県の山中で飛鳥時代のもものと思われる集落跡が見つかり、そこにあつた石碑から、魔人の実在が確認されたそうだ」

屋上

「…取り乱してすみませんでした」

氷麗はようやく落ち着きを取り戻していた。

「それはいいけど、ホントに大丈夫なの？」

「はい、心をしっかり構えてさえいれば見ても平気なんです。先程は不意だったものですから…」

深呼吸を繰り返している辺りから、まだ本調子ではないらしいが前よりはマシになっているようで、5回ほど深呼吸した後に、氷麗はリクオに向き直った。

「…あの絵は一種の魔除けです。妖術のような効能はありませんが、先程言いましたように名前や絵だけでも妖怪を追い払うことができます。節分のときに玄関先にお魚の頭と柗の枝を飾るような感じですね」

「あの絵にはそんな力があるの？」

「いいえ。あれで被えるのはせいぜい小物妖怪程度なので、気構えさえしておけばそれほど効果はないんですけど…」

再び清十字探偵団教室

「石碑はかなり古いもので、刻まれた文字も風化していて所々しかわからなかったそうなのだが」

『碑文訳』というリンクをクリックする清継。

開いたページには碑文の断片的な訳が載っていた

「何々…『天智帝の世より昔、この山に漂泊の民の村あり』」

「『優れた技と特異な術を持って』……えっと『周りのものと争い』

「『しかしある夜』…って感じなところが抜けてるんじゃない…『…』によって村は滅ぼされた」

島、家長、巻が碑文のわかっている訳を読んでいく。しかし巻の言う通り、肝心な部分は訳されていないようである。

「『その後生き残った一人が魔の人となって、…となった』…ここで終わりだね、碑文」

残りを読み終える鳥居。

それと同時に清継がホームページを閉じる。

「碑文の内容から察すると、山に住んでいた一族の生き残りが妖怪を斬る魔人となったのではないかと僕は思う」

「なるほど。でも清継さん、この石碑奈良時代に建てられたってありませんよ?」

「んで、最初の絵は江戸時代の物だつてさ」

「あ…それはその…」

清継もわかっていたが、あまりツツコンでほしくはなかったとこだ。以後清継の話は失速していく。

再び屋上

「あれは、あれを知っているだけ効力が増すんです。知っているだけその」

「知っているほど、動きや妖力を縛る術かなにかなの?」

「いえ、なんとというか「怖い」っていう気持ちが強くなって、どんどん動きが鈍くなっていくんです。私はあれを、奴良組の先代の皆様から伝え聞いたくらいですからまだ大丈夫なんですけど…」

「え、氷麗はあの魔人とは会ってないの?」

「はい…。あれは、江戸の中頃から現れてないんです。私は明治の頃に産まれたので実際には見ていないんです…。あ!」

しまった、そう氷麗は思った。何故かといえば、自分の年齢がわかってしまうようなことをさらっと言ってしまったからだ。しかも好きな相手に。

「あ、あ、ああ…」

今氷麗の頭には魔人のことなど消え去っていた。代わりに支配したのはやってしまった、という気持ちのみ。

ちなみに単純に数えて、明治生まれということは140歳ということになる。

「いやああああああーっっっ!」

不意に氷麗は走り出した。

全速力で。

顔をまっかにして。

「っ、氷麗!? えっちよつと!」

氷麗にリクオの声は届かない。

それどころか、他の誰の声も届かない。

誰も目に入らない。

ただただ、全力で走り去っていた。

火の付いた羞恥心が爆発的な加速を産んでいたから。途中で青田坊をはねたのにも気づかないくらいに。

その後リクオは置きっぱなしになっていた氷麗の荷物を取って帰路に付いた。

途中で会った家長達から氷麗の叫び声(どうやら学校中に響いていたらしい)のわけを詰め寄られて聞かれたりした。

ちなみに氷麗は先に家に帰っていたようで、リクオの帰宅を身を正して待っていた。

「取り乱してしまい、申し訳ありませんでした」

帰宅したリクオが見たのは、そう言って玄関先で土下座して謝る氷麗だった。

ちなみにリクオは氷麗の年齢のことなど全く気にしていなかったりする。

その頃、遠野との境界に近い奴良組の支部の一つがたった半日で潰されたのだった。

第二幕 曇りだす日常（後書き）

この話の序盤は今年の春頃で、それ以降を最近になって書きました。

なのでちょっと読みにくいかもしれませんが（^| ^ ;）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2471o/>

ぬらりひよんの孫～百鬼夜行対魔人～

2011年11月27日02時53分発行